司書課程を取得した皆さんへ

別府大学附属図書館長　井　上　富　江

職業柄、図書館とは切っても切れない関係にある。国内はもとより国際学会に参加した土地や大学の図書館を調べるのは非常に興味深いことであり、私にとっては必要不可欠なことでもある。もちろんフランスの国立図書館や各大学の図書館はいつもお世話になってあるところで、パリに行って他の人々が観光しているあいだ日がな一日図書館にこもって写本を読んでいるのが、私の生活になる。「何が楽しくて一日中閉じ篭っているんですか？」といわれる人もいるかもしれないのだが、これが本当に楽しい作業になることも多いのだ。

例えば、12世紀、13世紀の写本のなかからいろいろな情報を引き出すことができる。トゥルバドゥール（吟遊詩人）とジョングルール（旅芸人）たちの衣装や当時の楽器や見世物の数々。当時の楽譜の表記法やメロディー等。ミミズの這ったような文字に苦労しながらもおかしな挿絵にくすくすわらっていると一日のたつのは本当に短い。

パリにあるフランス国立図書館には、写本だけで、約53万の資料があるといわれている。そのほとんどは厳重にマイクロフィルムにされ、そのマイクロフィルムでさえ一般の閲覧にはだされていないものなので、専門家にとっては垂涎のまとで、その資料を読むために世界各国から許可を求めにやってくる。特に東洋関係の写本室には貴重なものが多いにもかかわらず利用されないので、日本明治期の非常に貴重な資料が眠ったままになっていると聞く。それを聞いた時、本当にしまった東洋史か日本史をやっておけば、これですぐ世界的な学者になったものだと、悔やんだものである。それはさておき、夏休みともなるとカタログを調べる人、新聞記事を読む人まで入場許可が必要なので、入場希望者で満員長蛇の列ということも珍しいことではなかった。最近新しい近代的な図書館別室がトルビアック通りにでき、CD-ROM やマルチメデイア関係の資料はそちらに移ったので混雑も少し緩和されたのだが…。私のささやかな楽しみは、旧館にあるマニュスクリ（写本室）のうち、私が利用できるのが本当に限られた資料だけなので、写本総数のその何十万分の一ということになってしまうのである。

今ではインターネットを通じて世界のいろんな図書館や書籍の情報が研究室にいながらにして得られるようになってきた。このパリ国立図書館にしても、www. brf. fr にアクセスするだけで新しい図書館情報が得られるような時代になった。しかし残念ながら写本については、現物を手にし、その質感や文字の流れ具合、色や文字に書き入れされた模様やイラストが写真ではうまくでない場合も多いので、現地に当分お世話にならなければならない。司書課程を勉強することになった皆さんが社会で活躍する頃にはこんな悩みもすべてクリアーされてしまうのでしょうか？図書館の姿も多様な時代のニーズに少しづつ合わせていかなければならなくなっている。しかし人間が生きている限り本に親しみ、本とともに成長する学生本来の姿が変わるはずもない。自分の手元に本を持つか否かは別にして…。

（いのうえ・とみえ）